

研究分野のキーワード：国語教育学，メディア・リテラシー，学習論

#### 研究紹介

人はどのようなときにもっとことばの力をつけたいと思うのでしょうか。誰かとの仲を深めるために話す力や聞く力を高めたいと思うかもしれません。あるいは文学や評論などから人生について深く考えるために読む力を高めたいとか、たくさんの人たちと考えを共有するために書く力を高めたいと思うかもしれません。ほかにもいろいろな理由があるでしょうが、こうした思いや願いを実現する場として国語の授業があれば、その授業はとても魅力的なものになるのではないかとわたくしは考えています。

国語を教える先生たちは、どうやったらそういう力が高まるのか、そしてその思いや願いが実現するのかということについて日々悩みながら教材を用意したり、子どもたちの言語能力を見取ったりしながら、授業を組み立てているわけです。わたくしの研究はそうした授業の組み立てを支える理論的な考えを用意しようというものです。これまで、国語の授業をよりよくしようとさまざまな分野の考えが応用されてきました。文学理論やコミュニケーション理論、あるいは教育学における授業論や評価論などがそうです。そこでわたくしは、メディア論あるいはメディア・リテラシー論と呼ばれるものに注目して研究をおこなってきました。

ことばのあり方を「メディア」という観点から見つめてみると、さまざまなことが見えてきます。例えば、教科書に載っている一連の物語群は、たくさんの物語表現の可能性なかでも主に文字というメディアによる表現だということ。人気の文学が映画化されると自分が読んだのとどこか違う印象を受けたりしますが、それは表現するメディアが違うことに起因します。あるいは、わたくしたちは自分がいま体験していることを誰かに知ってもらおうとすると、携帯を取り出し、自分が見ているものを写真に撮ってそこにことばを付けて送信したりします。文字だけでは伝えられないリアリティを写真に求めているわけですね。こうしたことを考えていくと、先に述べた、もっとことばの力をつけたいという思いや願いは、単に音声や文字を使いこなす力に対して向けられているというだけではないかもしれないということが浮かび上がってきます。メディアという観点から見つめることによって、ことばをより広い視野から捉えることができるのです。

わたくしたちは自分たちが生きていくうえで必要と感じないものを学びたいとは思いません。国語の授業をメディアという観点から見つめ、組み立てていくことについての理論は、学習者たちのことばの学びを彼らの生との深いつながりのなかで営むことを可能にし、そして学習者たちのもっとことばの力をつけたいという思いや願いが実現できる授業を可能にするのではないかと。このようなことを考えながら、わたくしは日々研究を進めています。